

嶋田智明, 大峯三郎(常任編集)/
加藤 浩(ゲスト編集)

「実践 MOOK 理学療法プラクティス
大腿骨頸部骨折
何を考え、どう対処するか」

新小田幸一
(広島大学大学院保健学研究科
心身機能生活制御科学講座教授)

医学系の専門書には、他を圧倒し近寄れないほどの知見を基に読者を惹きつけ、納得させようとするものと、身近な経験を基にこつこつと実例を示しながら、「あー、それでこのような治療法になるのか」と、いつの間にか読者の心を引き込んでしまうものがある。本書は紛れもなく後者に属するものと考え、加えて、ワンポイントレッスンの「ミニレクチャー」が実に適切な箇所に配置されており、初学者でも迷わないように配慮されている。同じように「Further Reading」では、知識の幅が広がるように、多過ぎない程度の文献が、程よく手短な説明とともに提示されており、まさに至れり尽くせりの感がある。

パート1では、まず患者と接触する前に行うべき治療に必要な情報収集に触れ、その後に行う直接的な患者との会話から得られる情報の取り方(「コツ」にあたる部分を含め)が詳細に述べられている。各術式と禁忌とされる肢位、理学療法評価法とアプローチは急性期、回復期、維持期に分けられ詳細に網羅されている。「回復期における理学療法評価」にもあるように、術後の状態・経過が良好か否かは、骨折の条件と手術結果に

かかっていると言っても言い過ぎではない。この点について、治療が理学療法士の独りよがりにならないように手術記録に必ず目を通し、術者と綿密な連絡をとりながら治療を進める大切さも怠りなく論している。

パート2では、ICFの観点から理学療法アプローチのポイントが扱われている。治療を阻害する廃用症候群や痛みに対するアプローチ、維持期からスムーズな退院と自宅での生活に繋げるための評価・治療のほか、自助具と福祉用具、自立度の向上を目指したチームアプローチ、患者の指導法が要点を外さずに解説されている。

パート3では、新たな視点に基づく理学療法の展開が述べられている。臨床推論の必要性と大腿骨頸部骨折患者の理学療法に反映させる重要性、そして適切な理学療法を行うための思考過程がまず詳細に記述されており、本疾患の患者は高齢者が圧倒的に多いため、加齢による認知の問題、姿勢制御能力の低下とバイオメカニカルな観点からの理学療法アプローチは、臨床実践で成功するためのヒントになるものと思われる。最後には、割かれたページ数は少ないものの、再度の転倒と骨折を起こさないような理学療法戦略について、転倒予測・予防のためには高齢者の「広義の転倒」を見逃さないことが重要であることが強調され、転倒予防教室での指導法がイラストレーションによってわかりやすく解説されている。

以上、本書は初学者や臨床実習に出る前の学生をはじめ、彼らの教育を担う臨床家はもちろん、教員にとってもお薦めの1冊となることは間違いない。

●B5判 212頁 2色刷
定価 5,040円(本体 4,800円+税 5%)
2009年 文光堂・刊